

東建パブリニュース

2019年10月28日

経営管理本部 広報IR室

《このニュースは、当社に関連する記事が掲載された新聞・雑誌等の情報を逐次、速報するものです。》

掲載

2019年10月27日 中日新聞 P. 1

●当社に関する記事の掲載がありましたので、以下の通りご報告いたします。

信長弟 有楽斎の愛刀 公開へ 国宝

名古屋 来年新設の博物館



織田信長の弟で、茶道家としても知られる武将・有楽斎が愛用した国宝の短刀「有楽来国光」が、来年六月に新設される名古屋市の博物館「名古屋刀剣ワールド」で公開される。運営母体で賃貸住宅大手の東建コーポレーション（同市）が入手し、同館の目玉として展示する。（中野祐紀）

短刀の正式名称は「短刀銘来国光名物有楽来国光」。鎌倉時代末期から南北朝時代の京都の刀工・来国光の作で、豊臣秀頼から有楽斎に下賜された。後に加賀藩の前田家に伝わり、名刀を記録した江戸時代の書物「名物帳」では五千貫（現在の価値で二億〜三億円）と評価された。

明治維新後に個人の手に渡り、戦後には所在不明とされた時期もあった。近年は埼玉県の資産家が所有し、一般公開はほとんどされていない。刀剣愛好家で東建コーポの左右田稔社長兼会長が業者を通じて交渉し、今年四月に有償で譲り受けた。金額は非公表。

有楽来国光の刀身は、長さ二七・七センチと短刀としては大ぶり。研ぎ減りがほとんどなく、不動明王を表す彫刻が保たれている。左右田氏は「刀剣、文化財も放っておけば東京一極集中が進む。三英雄ら武将に縁の深い名古屋で本物に触れられる機会をつくり、観光振興にもつなげたい」と話している。

国宝、重要文化財は適切な保存のため、期間を限定した公開が望ましいとされ、詳細な展示日程などは検討する。

文化庁によると、国宝の刀剣は百二十二件で、うち十一件はさやなど外装の「拵」だけで刀身がない。国や博物館などの所蔵ではない「個人蔵」は十八件。

織田有楽斎 安土桃山から江戸時代初期の武将、茶人で、本名は長益（ながしき）がます。尾張国（現愛知県西部）知多郡を治め、兄信長の死後は豊臣秀吉に仕えた。関ヶ原合戦では徳川家康方の東軍で戦功を挙げた大名に。千利休に茶道を学び、有楽流の開祖となった。京都・建仁寺から愛知県犬山市に移築されている茶室で国宝の「如庵（じょあん）」は、有楽斎の設計とされる。

①国宝の短刀「有楽来国光」 ②はっきり確認できる「来国光」の銘

以上